

呪詛の人形

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 中京区西院西溝崎町の中堂寺通馬代は、平安時代の楊梅小路と馬代小路の交差点にあたり、その北東は右京六条三坊六町です。この町の南西部の調査で、平安時代前期の邸宅跡の一画が見つかりました。馬代小路は、平安時代後期に流路になっており、前期のものは残されていません。

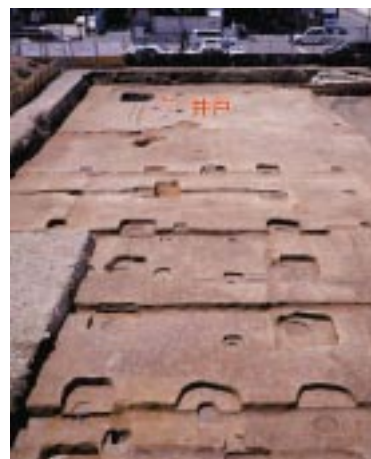
建物と井戸 邸宅跡は、建物跡2棟と井戸で構成されています。建物は、北の棟が、梁間2間、桁行5間の身舎に東西に庇の付く建物で、南の棟は、梁間2間、桁行1間を確認できただけです。それぞれ南北棟の掘立柱建物で、身舎の東側柱列が揃うことから同時期の建物と判断できます。

井戸は、南の棟の東北に近接して設けられています。掘形は上面で一辺4.2m、底部で1.9m、深さ

は1.8mで、底部には径1mの水溜め部が設けられています。この井戸には覆屋が設けられていて、掘形の四隅には柱間が2.4mの柱穴が残っていました。2棟の建物にともなう施設とみられますが、9世紀の前半には廃絶しており、井戸枠や水溜め部の部材は、すべて抜き取られています。

この井戸が廃棄された後の埋土から、男女1組の^{ひとがた}人形が出土しました。井戸の底部から、1mあまり上の所で、頭を東にして置かれ、南北に50cmほど離れています。

男性の人形 男性像は、高さ23cm、幅4cm、厚さ2.5cmで、角材を削りだして丸彫^{たてみ}の立身に表しています。両腕は柱目の別材で作成、後ろ手に廻しています。上腕は半肉彫りで内側に平坦な面を作り、前腕は丸彫です。体側の肩部



建物跡と井戸(北から)

に、後ろ下がりの接合部を削り込み、上腕をはめて木釘で固定しています。頭には烏帽子状の被物をもうけ、顔は目・鼻・口を削り出します。脚は軽く膝を曲げた形で、足はややつま先立ったように前傾しています。

墨描きによって眉毛、瞳、耳、口髭、顎髭があらわされ、被り物と頭髪も黒く塗られています。人



人形の出土状況



男性と女性の人形

名は、胸部から腹部にかけて「葛井福方呂」と2行墨書されていますが、墨書の後、腹部の一部は木目が剥離しており、文字が欠けています。

女性の人形 女性像は、高さ16.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cmで、角材を削りだして丸彫りの立身に表していますが、全体に華奢で、丸みを帯びた造形に仕上げられています。腕の部分は欠いていますが、体側肩部に木釘や接合部が認められ、男性像同様に後ろ手に廻した両腕が付けられていたようです。墨で黒く塗った頭は、髪を結っており、「頭上一髻ずじょういっきつ」と思われます。顔は、目・鼻・口を削りだし、眉・目・口に墨描きを加えています。首は細く撫で肩で、胸部・腹部はやや膨らみ、ふくよかに表現され、乳首も墨描きであらわされています。脚は細目で軽く膝を曲

げ、足首以下は欠損しています。人名は胸部から腹部にかけて「檜前阿古ひのくまゑこ」と記されています。

材質と墨書 2体とも木質は杉材で、板目の木裏（木心側）を正面、柁目を側面に木取りしており、削り込んだ表・裏には複雑な板目模様の縞が現れています。

平安京内でこれまでに見つかった人形は、薄板によって作られたものがほとんどで、ほかに、こけし型の人形が数点ある程度です。それに比べて、今回見つかった人形は、立体的で精密に作られており、それぞれに人名が記されていた点など、今まで類例のないものです。

男性像に墨書された葛井氏は、河内国志紀郡を本拠とした渡来系氏族です。長野郷藤井寺（大阪府藤井寺市）の地名にもとづく氏名で藤井とも書きます。平安時代は

下級官人として、一族の一部が右京に居住したことが知られています。女性像に墨書された「檜前」も明日香を本拠とした渡来系氏族檜隈氏に関連するとみられます。

人形の性格 「後ろ手」に関連する事項には、犯罪者を捕らえる捕縛・自白を強要する拷問・悪事の発覚や顔をさらしものにする面縛などの悪いイメージのものはありません。幸せを願う袂えではなく、男女の離別あるいは呪殺を願った呪詛の人形でしょう。

墨書された人名が、この宅地の居住者であったのか、あるいはその関係者であったのか結論は出せません。いずれにしてもこの人形は、平安の新京に潜むおどろおどろしい呪の世界を物語るもので、精巧な作りや板目の縞模様からも、込められた思いの深さがうかがえそうです。（南 孝雄・原山充志）